

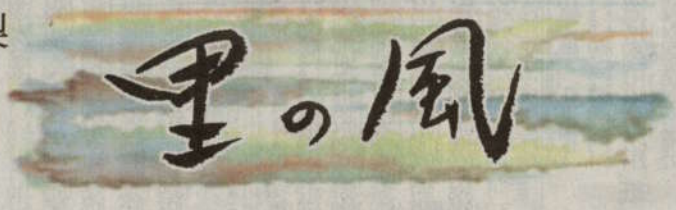
衆議院議員選挙の日、投票会場となつている南阿蘇村の両併小学校では運動会も開催された。全校児童は二十数人。児童だけでは盛り上がりに欠けるためか、毎年地区住民も参加する大運動会となっている。稲刈りで忙しい農家も、その日だけはお休み。普段から体を動かしている農業者は主戦力になるからである。地区の皆と会えることと、やたらと出番が多いのがこの運動会の特徴だ。

東京で電車通学をして育った私にとつて、この地区をあげての運動会は実に新鮮である。市町村合併を機に各地で小学校の統合が進んでいるが、規模が小さいからこそ生まれる結束や、先生との密な触れ合いを考えると、両併小学校の存続を願ってやまない。

ところで、今年はこの運動会に二人のドイツ人が参加した。どちらも日本各地で講演するために来日していた大学教授で、週末を南

# 南阿蘇

吉田 愛梨



## バイオエネルギー村



絵・有働 孝昭

阿蘇で過ごしていた。競技にも参加したが、一番印象に残ったのは「昼ご飯だとか。ドイツでは運動会などの弁当はたいていサンドイッチと果物に決まっている。重箱や弁当箱に詰めた色とりどりのおかずやそれを分け合っている様子を見て、「素晴らしい食文化だ」と

感激していた。彼らはドイツで、エネルギーの自給を目指した「バイオエネルギー村」と呼ばれるプロジェクトの指導をしている。村内で発生する家畜の糞尿(ふんによう)や間伐材に加え、休耕地で燃料用に育てた作物によって、村に必要な電気

と熱のすべてを供給してしまおうというプロジェクトで、人口八百人というドイツの小さな村(村というより村内の一地区)での取り組みである。発電施設と熱供給施設は今月中に完成する予定で、今冬から電気と熱の供給を開始する。

再生可能なエネルギーに転換することで、村内で発生する二酸化炭素が六割も削減されるといふ。六割減といえ、欧州連合(EU)が二〇五〇年の目標にしている値だ。たとえ小さな地区での取り組みであっても、六割減の達成はEU初となる。

小さな地区でのプロジェクトを指導してきた二人の教授が、国境を越えて小さな地区での運動会に参加した。再生する資源が豊富で、人々の活気もある両併地区での週末を満喫した彼らは「ここもいつかはバイオエネルギー村になるといいね」と言っていて、次の講演予定地に向かった。

(おあしす米生産者、NPO九州バイオフォーラム理事長)